

環境に優しい茶栽培を目指して

北相地区事務所

近年、化学農薬や化学肥料を減らした環境に優しい農業が進められています。これは茶栽培でも例外ではなく、山間地の水源に近い地域で栽培が多いことから、重要な課題となっています。このため、北相地区事務所では環境に優しい茶栽培についての検討を行っています。

整枝等の技術を組み合わせ、化学農薬を31%減らした栽培を検討したところ、二番茶以降にチャノキイロアザミウマの発生が若干多くなりましたが、それ以外の病害虫は特に多くなることはありませんでした。

また、堆肥等を使用して、化学肥料を24%減らした栽培を検討したところ、収量は、肥料を切り替えた当初は減りましたが、3年目からは慣行栽培と変わらない結果となりました(図1)。ただ、茶の旨味の指標とされる全窒素含有率については若干少ない傾向が見られているため(図2)、慣行栽培と変わらない品質のものが出来るような施肥や栽培体系を検討する必要があると考えられました。

今回検討した栽培の詳細については「環境保全型農業栽培の手引」としてまとめられていますので参考にしてください。

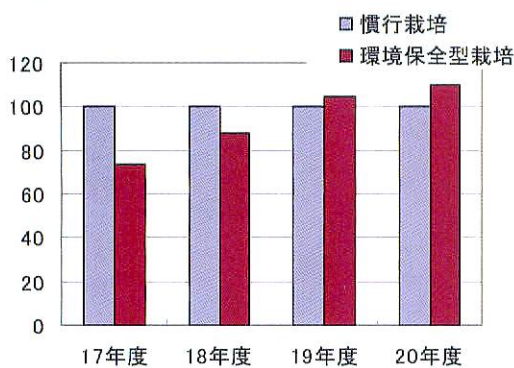


図1 一番茶収量(慣行栽培を100とした収量指数)

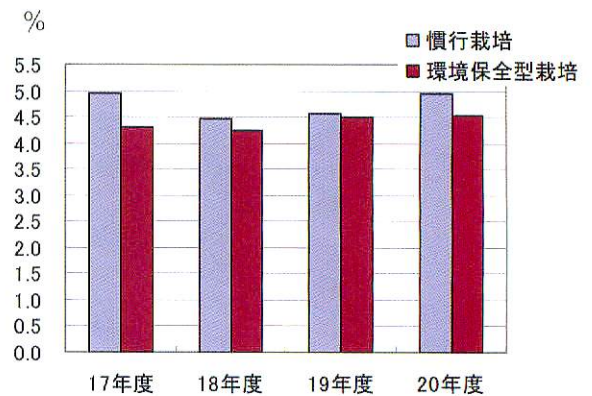


図2 一番茶全窒素含有率

多品目小規模産地における交信攪乱剤の効果実証

病害虫防除部

野菜生産では害虫による食害が深刻です。この害虫のうち発生が多いハスモンヨトウなど6種類の成虫雄雌の出会いを性フェロモンで攪乱し、幼虫発生を抑制するものがコンフューザーV(アルミゲルア・ウワバルア・ダイアモルア・ビートアーミルア・リトルア剤)です。この剤は少品目生産の大産地ではその効果が実証されていますが、本県のような、一部の産地を除けば多品目生産の小面積農地が多い地域での効果は不明でした。

そのため、平成18年度は藤沢市亀井野で6ha(キャベツ)、平成19年度は中井町井ノ口で5ha(秋冬野菜)、それぞれ試験を実施しました。その結果、交信攪乱効果は確かめられましたが、試験区外からの飛び込みなどの影響で、防除にまでは至りませんでした。

そこで、今年度は8~11月に平塚市土屋で10ha(秋冬野菜)の試験を実施したところ(図1)、多品目が生産されている農地でも、10ha程度の面積があれば、フェロモン濃度が維持でき、飛び込みの影響も少なく防除効果が期待できるという結果を得ました(図2)。

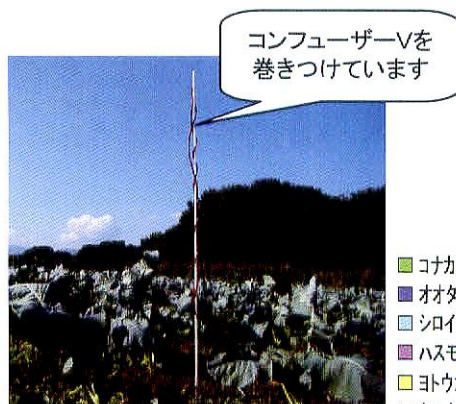


図1 平塚市土屋における試験

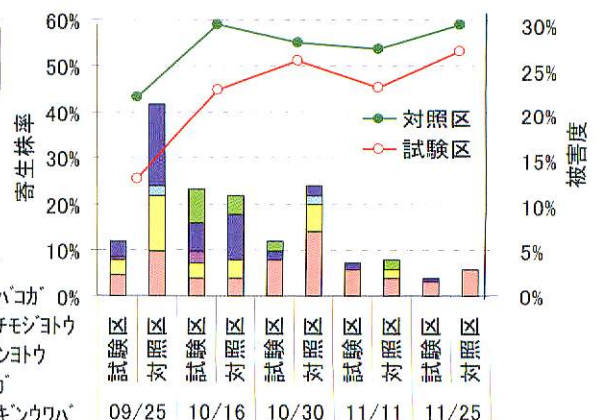


図2 寄生株率と被害度